



何年間か一度 盛岡から宮古までの山田線に乗る。はなやかな新幹線の乗り入れる盛岡駅の片隅から、一日に数回ディーゼル車が1両か2両でゆっくり走り出す。街中の駅ま一つ二つですく山に入り、川に沿って緑に染まるような樹林の中をエンジン音を高くして、ひたすら上り続ける。目の下の木の間越しに車のほとんど通らない小さな道がずーっと目に見えながら、小一時間で登りきり、ぽかっと林を抜けると禪野を広く広げた三角錐の奥羽神岳の禪野に広がる峠の高原に出る。そこが区界の駅、北上山地の一角なのだ。

広く広がる青空の下で、気持ち晴れ晴れと広がるが、冬は一面の雪景色で吹雪いたりするとなお良い。まあ、夏だから明るい緑の海で、高原のさわやかさに、お客めいめい扇風機のスイッチを切ったまま列車は今度は流れる方向を逆にした川に沿ってゆっくりとした下りを行き、貧しいサイロや住宅を緑の中に見ながらなお下る。

そこから流れに沿って太平洋に出るまでの川に沿って行く車窓は、本当に鉄道開けに出るような正しい日本の山村風景が、木々のあふれるような緑の葉の流れの向こうに、重なり続ける山々を背景にして続いている。季節ごとに異なる山村のたたずまいを見つめ続けていると、今の狂奔しているニゲンの社会のエネルギーのほとばしりがまだここまで征服してないことに安堵しながら、延々と緑を見続ける。

穏やかな気持ちのまま葉陰がゆったりときらきら光って流れる水辺に竿をさす人々などを見つめて走り続ける。ようやくディーゼル車の周りは徐々に広がってゆき、遠く山の上に大きな一本の煙突が見え出すと、三陸海岸の宮古はもうすぐだ。しばらくして明るい氷色の屋根がさわやかな宮古駅が骨に入む。

いつも、この日本の良心のような緑の鉄道をたどると、なんとなくうれしくなり、何か生まれ変わるような気もする。今年もいくつかの不幸を抱えてたどった道が、山と川はそんなものはまるごと抱えて浄化してしまう力を持っている。ベトナムだ、バングラダとろわろわど黒い、浮き足立っている足元をしっかりと照らしてくれて、もっとゆっくり見直してみようと思ったりもしてくる。

まあ、駅前の料理屋「ジャノメ」の二階が上がってしまうと、もう、寿司だ、ホタテだ、イクラだ、ホヤだ、いや、ラーメンかエビフライか、それともカツどんかなどと一気にお祭り頭になってしまうが、ニゲンはそれも当たり前だからまあ、反省してもしょーがない。食ったときは食べまじいのだ。

ついでに宮古に行ったら、市内の「魚市場」に行くとも舌も財布も満足してくれる。そのまま、港に出て、観光船で三陸海岸の数メートルの高さの岸壁群を見ながらかもめこえさをやっても良い。まあ、蛇足だが、などと余計なことを考えながら仕事に戻った。少し緊張してやるべきことをもう一度見直してたきなおさなければならぬ。計画が立ってれば気持ちが不安定になることもないというのは今までの経験でわかっているのだ。まあ、このところ物忘れがひどいから、何かをころっと忘れてしまうことも十分考えられるから危ないのだが、見なければいけぬ書類も多すぎる。まあ、はじめるしかないが。

それにしても、この夏は暑くて作業がはかどらないとおびただしい。何しろクーラーは使わないからよけいだが、それはそれでいいのじゃないかな。こんな暑さの中や真冬でも同じ能率で仕事をしなければいけぬなんてほうがおかしいのではないだろうか。暑くてばてるときは早めに仕事を始めて、昼寝をしてから、また夕方がんばればいけぬのだ。こんな酷暑でもいつもと同じように能率よく働かなければいけぬなんて思うから、膨大な燃料を撒き散らすように使い、地球は熱くなり、氷は溶け、陸地は海に飲み込まれていくのだ。あの緑の沿線の一隅に移って、もっと生き物らしく生きていけぬなど今思っています。しかしまあ、とりあえず仕事をするのが先かな。道はまだ遠そうです。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX 03 5600 0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com